

平成30年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1 調査日 平成30年4月19日(木)

2 調査対象 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

3 調査内容

(1)教科に関する調査

○調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～6学年> 国語、社会、算数、理科

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

品川区立山中小学校

国語（実施学年2～6年）

（1）国語の定着状況についての概要

		国語への関心・ 意欲・態度	話す・聞く能力	書く能力	読む能力	言語についての 知識・理解・技能
2年	目標値	73.8	68.0	83.3	67.5	90.0
	全国正答率	77.0	71.3	86.4	70.7	94.6
	校内正答率	76.0	69.2	87.3	72.0	89.6
3年	目標値	68.1	77.1	59.5	63.6	81.4
	全国正答率	68.6	80.8	58.0	63.8	84.3
	校内正答率	71.8	81.9	62.8	69.8	89.2
4年	目標値	66.9	67.0	62.7	65.0	71.0
	全国正答率	66.8	67.0	62.6	64.5	73.8
	校内正答率	72.9	70.9	71.7	68.8	82.3
5年	目標値	61.9	60.0	56.0	71.6	70.4
	全国正答率	62.3	60.3	57.4	74.9	76.4
	校内正答率	66.3	67.2	59.4	82.6	78.0
6年	目標値	66.9	64.4	64.1	69.4	64.4
	全国正答率	69.5	64.3	68.5	74.0	69.0
	校内正答率	69.5	63.4	68.9	75.4	68.3

※目標値…学習指導要領に示された内容について、設問ごとに正答できることを期待した児童の割合

昨年度行った学力定着調査では、「書くこと」の力を高めることが課題であったが、知らせる相手や目的意識、書く視点をもたせる工夫をしたことにより、今年度は、目標値より上回る結果となった。

全体を通して、他の観点でも今年度の校内正答率は目標値のポイントを上回るものが多く、概ね目標を達成できたといえる。

（2）具体的な課題とその要因

目標値を下回った2項目についても、1ポイント以上下回るものではなく、どの学年もほとんどの観点において概ね目標値を達成したといえる。実際の設問では、第2学年の「第1学年配当漢字を書くことができる」の問題のうち、「虫」「休（む）」を解答することや、第6学年「話し合いの内容を聞き取る」問題のうち「討論会の参加者として、相手の発言内容についての質問をすること」についての正答率がやや低かった。

「言語に関する知識・理解・技能」の観点では、既習の漢字を送り仮名や読み方の違いにも気を付けながら正しく読んだり書いたりする力や、「話すこと・聞くこと」の観点では、相手の話の内容を受けて自分の思いや考えをまとめて発信したり表現したりする力に、課題があると考えられる。

要因として、課題を決めた話し合いにおいて、互いに意見を聞き合う経験が足りないためと考えられる。

（3）課題解決のための方策と次年度の数値目標

既習漢字については、様々な読み方や活用法がある。音訓以外にも活用の違いで送り仮名の有無が変化したり、他の漢字と合わせて熟語となったりと、一つの漢字を広く応用できる力を身に付けていく必要がある。読書を通し多様な言い回しに慣れ親しんだり、一つの漢字から言葉を連想したり、熟語作りをしたりする活動を積極的に取り入れていきたい。

また、相手の話の内容を受けて自分で質問するという場面は、学校や生活の様々なかかわり合いの中に見られる。話題に沿った質問内容となっているか、テーマに基づく話し合いの場面を設定し、ペアやグループ、クラス全体で互いに聞き合う経験を積み重ねていくことが表現力を高めると考える。

次年度の数値目標について、すべての項目で校内正答率が全国正答率を上回るようにする。

社会（実施学年4～6年）

（1）社会科の定着状況についての概要

		社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	観察・資料活用の 技能	社会的事象についての 知識・理解
4年	目標値	54.3	56.8	69.6	67.1
	全国正答率	54.7	57.1	69.1	66.8
	校内正答率	62.2	64.3	70.6	70.7
5年	目標値	60.6	56.9	60.5	63.2
	全国正答率	64.1	59.1	60.1	62.9
	校内正答率	63.9	59.2	61.1	62.1
6年	目標値	59.0	60.7	64.5	63.6
	全国正答率	61.4	62.7	72.6	71.9
	校内正答率	61.2	61.9	66.3	64.2

※目標値…学習指導要領に示された内容について、設問ごとに正答できることを期待した児童の割合

昨年度までの学力定着度調査では、資料の読み取りや、そこからの関連性や事実を読み取ることが、目標値の同程度や上回る結果であった。

今年度は、どの学年も目標値に対し同程度か観点によっては上回るものがある。しかし、全国正答率と校内正答率を比較すると、学年が上がるにつれて、大きく下回ることはないものの、同程度かやや下回る観点もある。

（2）具体的な課題とその要因

どの観点も目標値より下回るものはなく、概ね基本的な学習内容は身に付いているといえる。設問によっては、正答率の低い「観察・資料活用の技能」の力を伸ばしていく。

実際の設問では、第4学年は「工場の生産物の出荷に関する資料から、他地域などのかかわりについて読み取る」第5学年は「土地の断面図から県の様子を読み取る」や第6学年は「国土の自然などの様子についての特色や理由を、資料から読み取る」などの正答率が低かった。一方で用語（地図記号や地図中の方位、マスメディアの種類等）を問う問題の正答率は高かった。

知識を活用し、資料から関連を考えたり、事実を正しく読み取って表現したりすることに課題があると考える。その要因として、地図や写真、グラフなどを読み取り、わかったことを伝え合う活動が足りないためと考えられる。

（3）課題解決のための方策と次年度の数値目標

「観察・資料活用の技能」の力を伸ばしていくために、地図や写真、グラフや表から読み取る学習活動を意図的に授業の中で取り入れていく。グループで話し合いをするなど、読み取ったことを伝え合う活動を通して、資料をもとに多面的に理解させ、そこから知識の習得や理解にもつなげていく。

次年度の数値目標は、全国正答率より上を目指す。さらに、どの観点でも目標値の+5ポイント以上を目指す。

算数（実施学年2～6年）

（1）算数の定着状況についての概要

		算数への関心・ 意欲・態度	数学的な考え方	数量や図形 についての技能	数量や図形につい ての知識・理解
2 年	目標値	71.1	68.4	81.0	83.2
	全国正答率	70.4	67.8	85.0	84.7
	校内正答率	75.3	68.7	87.1	88.8
3 年	目標値	61.0	67.2	79.3	71.1
	全国正答率	63.3	65.5	80.5	70.8
	校内正答率	71.7	73.2	86.0	76.1
4 年	目標値	72.5	64.4	77.6	74.7
	全国正答率	71.4	66.5	79.8	74.7
	校内正答率	69.6	65.9	79.8	75.7
5 年	目標値	57.5	61.1	68.6	66.9
	全国正答率	51.0	57.5	66.1	64.4
	校内正答率	52.8	60.9	67.7	67.1
6 年	目標値	40.0	56.8	68.2	71.3
	全国正答率	32.2	53.0	69.9	72.7
	校内正答率	38.9	57.1	70.5	74.4

※目標値…学習指導要領に示された内容について、設問ごとに正答できることを期待した児童の割合

昨年度行った学力定着度調査では、目標値に対し、同程度か観点や学年によっては上回っていた。

今年度は2学年、3学年は目標値に対し、同程度か上回っている。4学年、5学年、6学年はどの観点も目標値より5ポイント以上下回るものはなく、概ね基本的な学習内容は身に付いているといえる。しかし、算数への関心・意欲・態度が目標値を下回っている。

（2）具体的な課題とその要因

実際の設問では、第二学年・第四学年・第五学年では「量と測定」の領域（長さ・重さ・角・面積等を扱う学習）の正答率が低かった。実際の説明では4年生「身近なものの重さを推察して適切な単位を答える問題」、5年生「長方形の面積を求め、単位換算して答える問題」の正答率が低かった。

水のかさや、ものの重さ、面積などの量感をもておらず、正しい単位換算ができていないことが要因だと考えられる。

（3）課題解決のための方策と次年度の数値目標

「量と測定」の力を高めていくために、授業の中で、児童一人一人が測定をするなどの、算数的な活動を取り入れ、量感をもてるようにする。また、できるだけ実生活に沿って考えられるような学習を進めていく。

次年度の数値目標は、全国正答率より上を目指す。さらに、どの観点でも目標値の+5ポイント以上を目指す。

理科 (実施学年 4～6年)

(1) 理科の定着状況についての概要

		自然事象への 関心・意欲・態度	科学的な 思考・表現	観察・実験の 技能	自然事象についての 知識・理解
4年	目標値	76.3	61.3	80.5	70.7
	全国正答率	81.0	64.0	85.9	73.4
	校内正答率	79.8	64.4	86.9	72.7
5年	目標値	70.5	63.6	70.5	71.3
	全国正答率	72.7	66.0	75.5	73.9
	校内正答率	70.4	67.6	75.7	68.4
6年	目標値	60.7	64.0	68.7	68.7
	全国正答率	62.0	68.6	72.5	70.9
	校内正答率	58.5	64.2	70.8	65.9

※目標値…学習指導要領に示された内容について、設問ごとに正答できることを期待した児童の割合

校内正答率と目標値を比較すると、概ねどの観点においても同程度であった。しかし校内正答率と全国正答率との比較では、5ポイント程度下回っている観点が4つあった。昨年度は、科学的な知識や思考を表現することが課題であり、学習活動の中で、自分の予想の根拠を説明する、実験結果の考察を班で話し合う場を設定した。そのため、昨年度から3ポイント程度の伸びは見られた。

(2) 具体的な課題とその要因

全国正答率との比較では、全体の底上げが必要だと言える。実際の設問を見ると、特に以下のような課題が挙げられる。

① 自然現象について理解すること

本テストでは、「生命・地球」「物質・エネルギー」の単元において正答率が低かった。主に「月と星」「電気のはたらき」「生き物」である。この結果から、生命の連続性や気象現象の規則性についての基礎知識に課題があると考えられる。学習したことを体系的に理解できていないことが要因だと考えられる。

② 考えたことを表現する力を付けること

昨年度の結果から、指導内容をしぼって取り組んだ。そのため、根拠をもって説明すること、実験結果の考察をすることを重点的にすることで、学習内容の定着が見られた。しかし、未だに全国正答率より下回っている学年もある。観察や実験などを行う際、予想や仮説を立て、結果の方法を発送できていないのが要因だと考えられる。

(3) 課題解決のための方策と次年度の数値目標

自然事象について理解させるために、1単位時間の最後に、本時の学習の振り返りを行い、まとめる活動を設定する。1時間の中でまとめさせることで、知識の系統的な理解につなげる。

表現する力を付けるために、学習活動の中で、自分の予想の根拠を説明する、実験結果の考察を班で話し合う、といった機会を設定する。その中で、友達を考え等もメモを取る活動に取り組む。

次年度は、特に自然事象の知識・理解の目標値を上回るようにする。